

7・思い出せない記憶

6から数週間後。三月。まだ主人公達が住む地域には雪が残り、肌寒い時期。主人公とトワ、温泉地まで一泊旅行に来ている。

しかし主人公、一回温泉に入った後、疲れて部屋で寝てしまつた。

トワ『よっぽど疲れてるんですねえ……』と思いながら、すやすや眠る主人公の隣で、鼻歌を歌いながら隣に座つて眺めている。

トワ、正直なところ、寝ているこの隙に主人公にキスしたいと思う。

『でもそれ、ちゅーした瞬間目を覚まされてバレるやつですよねえ……。日本のコミックでよくあることです……』と思い、何もせずにただ主人公を見つめている。

そこで、主人公が目を覚ます。

SE1：【5秒ほど流してからセリフ。その後、トラック中ずっと流す】部屋の環境音

（トワ）

【十秒ほど、適当に鼻歌を歌う】

ふん…ふん…ふん…♪

（トワ）

主人公、教えたつもりはないのに、トワが自分の好きな曲を歌つていて驚く。

曲は十三年ほど前にリリースされた曲。時期的にトワが知つていても不自然ではないが、主人公はそれに妙な引っ掛けたりを覚える。

SE2：【0—5秒くらいまでを使用】主人公が布団から起き上がる音

（主人公）

「はへつ。寝てた……？」

（トワ）

「あ● 起きた●

はい● 温泉から上がつてすぐ、ぐつ、すり●

お風呂入つた後つて眠くなりますよねえ」

SE3：【0—2秒ほどまでを使用】トワが起き上がる音
SE4：トワがペットボトルのお茶を注ぐ音

〈トワ〉

「はい、お茶♥ 喉乾いてますよねえ？」

SE5：【3—4秒ほどまでを使用】トワが横に腰掛ける音

〈主人公〉

「あっ……ありがとうございます……。今つて何時……？」

〈トワ〉

「四時です♥ まだお夕飯まで時間ありますから、大丈夫ですよ♥
アーリーチェックイン様々です♥」

〈主人公〉

「そっか……よかつたあ……」

〈トワ〉

「ふふ。よっぽど疲れてたんですねえ。
まだ寝ててもいいんですよ？」

〈主人公〉

「ううん……せっかくトワちゃんと一緒なのにもつたいない……起きる……」

〈トワ〉

「わあ、嬉しい♥ じゃ、ご飯までおしゃべりしてましょっか♥」

〈主人公〉

「そうだね。じゃあ、なんのお話しよっかあ……」

〈トワ〉

「何のお話します〜？」

主人公、これは話してみるチャンスかもしれない。と思う。

主人公は以前トワにはつきり否定されたものの、未だにトワと自分は、昔会ったことがあるのではという疑念がぬぐえない。

それを確かめるために『夢で見た』ということにして、過去の話を始める。

〈主人公〉

「……そうだ……。あのねえ……夢を見たよ……」

〈トワ〉

【優しく】

「うん? どんな夢ですか?」

SE5:【0—3秒ほどまでを使用】トワが横に腰掛ける音

〈主人公〉

「……昔の夢……」

昔わたし、事故に遭つたことがあつて。その頃の夢なんだけど……」

〈トワ〉

【心配そうに】

「ああ、昔の……。サトリから聞きました。

アナタって、十三年前の冬。

お友達を助けようとして事故に遭つて。その頃の記憶がないんですよね?
何か、思い出したことでも?」

主人公、頷く。

さとり曰く、当時自分は、友達一人、合計二名で外で遊んでいた際、道に飛び出しかけた
彼女を助けようとして事故に遭い、二人そろつて数日目を覚まさなかつた。

しかも目を覚ました後は、事故のショックで、二人とも十二月に起きた出来事を、ほとんど
忘れてしまつていたらしい。

さとりが1で言つていた「困つてる人を見たら、考える前に助けちやうの。十三年前の時
だつて……」というのは、このことなのである。

しかし、主人公はその話に今でも納得がいっていない。

携帯電話に残つたスケジュールによると、当時は『さとりも含めた三人で、主人公の自宅
で遊ぶ予定』であり、事故現場は、主人公宅へ向かう道とは、まるで別の場所にあつたから
である。

さらに主人公、当時自分にはとても大切な何かがいて、それは、絶対に忘れてはならない
ものだったような気がしている。

事故の件同様、携帯電話に残つたメモには『それ』に関する記述がある。

しかし、当時の自分は誰かに見られることを恐れたのか『それ』に関して、万が一メモを

誰かに読まれても問題ないような書き方をしている。

たとえば『彼女と一緒に過ごして楽しかった』『彼女はこんな音楽を好んだ』などはあるが、それが誰なのかは明確にしていない。

もしかすると、相手はさとりや、あるいは一緒に事故に遭った友人なのでは……と解釈もできるような、あいまいな表現にとどめているのである。

主人公、今でも、当時のことと思われる断片的な光景を夢に見る。それは、自分が小さな生き物を抱いて、こつそり夜の公園に行く夢である。その生き物が何なのかは思い出せないが、自分にとつてはとても大切な思い出であつたはずだ。

そして十三年が経過したが、主人公は、十三年前一緒に公園に行き、自分が『彼女』という名で日記に書き綴つた存在こそが、火災の日に助けてくれた謎の存在ではないかと期待してしまったことがある。

そして今トワは『彼女』が好きだったあの曲を歌っていた。

あまりにも荒唐無稽なのはわかっているが、主人公には、トワと、火災の日に助けてくれた謎の存在、そして『彼女』が無関係だとは思えないでのある。

〈主人公〉

「……思い出してはいるんだあ。でもね、確かめようがなくって。
わたしと、もう一人しか知らないことだから。
現実に起きたことなのか、夢なのか判別ができないの。
だから、本当にただの夢なのかもしれないし……。
実際に起きたことなのかもしれない。
——わたしはその頃、公園に行つたはずなの」

〈トワ〉

「公園？」

〈主人公〉

「……うん。私はその人……。いや、人なのかな……。
わたしの手で抱えられるくらい、とても小さかつた気がする……。
……とりあえず『人』にしよう。
わたしはその人に、その公園の景色を見せたかった。
だからある日、夜にこつそり家を抜け出して、一緒に出掛けけるの。
その日は雪で、すごく寒くて……。
とても長時間外にいられるような日じやなかつたんだけど……。
その人はすごく喜んでくれた。わたしはそれが嬉しかつた。
短い時間だつたけど、すごく幸せな思い出になつた。

でも、誰に聞いても『そんな人はいなかつた』って言う。

つまりは学校の同級生でもないし、塾や習い事とかで出会つた人でもない。

昔から近所に住んでる仲のいい人であるはずもない。

もしかしたらお見舞いに来てくれるかなって思つたけど、その人は現れなかつた。

それどころか事故以降、完全に消息を絶つてしまつた。

じゃあ、あの頃わたしが仲良くしていた人は、一体誰だつたんだろう。

存在しないはずなんかない。

あんなに、とてもとても仲が良かつたはずなのに……って、思うんだ」

〈トワ〉

「えーっと、当時仲の良かつた人？ と一人で公園にお出かけして。すごく楽しかった記憶があつて。

今でも、というか、今まさにその夢を見たけど……。

自分は事故で記憶をなくしてしまつたし、その人と会う術もない。

さとりすら、その人を知らないみたいなので。

それが本当にあつたことなのか、それともただの夢なのか、確かめようがないってことですか。

……でも、抱えられるほど小さいってことは、その人って相當年下か、そもそも人間じやなさそうです。

アナタ。その頃隠れて動物を飼つていたとか、ですかねえ？」

〈主人公〉

「わからない……。でも、会いたい……。

だから、わたし、ずっとその人を探しているの。

この街で待つていればいつか会えるような気がして。

たとえわたしがわからなくとも、彼女が覚えていてくれたら、彼女の方から声をかけてくれるんじやないかって。

今でも……どうしても……期待しちゃうんだ」

一方、トワ、主人公の話に激しく動搖する。

主人公とその友人の記憶は完全に消したはずなのに、断片的な部分ではあるが、主人公がそれを覚えていたからである。

トワ、そんなことはありえないと思つていた。だからこそ自分はまったくの他人、最近初めて会つたばかりの人間としてもう一度会いに来たのである。

しかも主人公は、今でも自分を探して、待つてているのだという。

トワ、どうしたらしいかわからず、混乱する。

〈トワ〉

【悟られないように明るく】

はは～ん。だ、か、らアナタ。

トワと初めて会った頃に『昔会ったことないか』って聞いて来たんですね～？
トワ、何でそんなこと聞くんだろお？ って思ってましたよお。

そうだったら、素敵でしたけど。そうじやなくって、ごめんなさい♥

【少し間を置いてから優しく】

……今でも会いたいです？ その人に？」

〈主人公〉

「会いたい……。会って、わたしが忘れていることを全部取り戻したい。
そしてできるなら……もう一度仲良くなりたいって思ってる……」

トワ、たまらなくなる。

一度主人公から離れて気持ちを落ち着けなければ、とても今日一緒に一泊する」となじ
できないと感じる。

トワ『唐突ではあるが仕方ない』と、身体を起こす。

〈トワ〉

「あはっ♥ なーんか妬けちゃいます♥」

〈トワ〉

SE6..【8—13秒ほどまでを使用】トワが起き上がる音

〈トワ〉

「……お話ししてたら、何だかお腹すいちやいましたね♥
トワ、ちょっと下の売店でアイス買つてきます♥
アナタも何か欲しい物ありますう？」

対する主人公、やはりトワは無反応であった。やはりすべては自分の妄想なのだろうか？
と不安になる。
だが、どうしても納得がいかない。

直接聞く以外にも、まだ試す方法はあるはずだ……。と知恵を絞る。

〈主人公〉

「ううん？ 特にないかな。待ってるね」

〈トワ〉

「わかりましたあ。では行ってきます♥」

トワ、軽快なリズムで部屋を出ていく。その姿には、一見動揺は一切感じられない。

SE7..【0—10秒くらい】トワが畳の上を歩く音

SE8..【0—5秒くらい】トワが部屋の扉を開けて、閉める音

SE9..【0—7秒くらい】トワがスリッパで歩く音 ※しばらくして、止まる

トワ、一人旅館の廊下を歩き、エレベーターの前まで行く。周囲には誰もいない。そこで、ぽつりとつぶやく。

※台詞前に、大きく息を吸う音を入れてください。

【暗い声で、ぼそりとつぶやく】

潮時、かな……

〈トワ〉

「」